

岡本宗好家集、田村宗永編『露底集』

解題と翻刻（中） 秋の部

大 谷 俊 太

本稿に於いては、前々号（23号）所載の「岡本宗好家集、田村宗永編『露底集』解題と翻刻（上）」、前号（24号）所載の「同（中）春・夏の部」の翻刻に引き続き、架蔵本、田村宗永編『露底集』中冊に収まる春・夏・秋・冬の部のうち、秋の部の翻刻を行う。

対校本として、管見に入った同系統の唯一の伝本である国文学研究資料館所蔵本（写本一冊、中冊部分のみの端本、国文研本と称す）を用いた。両本の書誌的事項等は前々稿・前稿を参照されたい。

〔翻刻凡例〕

一、本稿には宗永本『露底集』（架蔵）中冊のうち、秋の部の翻字を行った。

一、中冊の中で、和歌に通し番号を振った。

一、国文研本にのみ書き入れられている和歌は、当該箇所直前の和歌の番号に、を付して（ ）内に記した。

- 一、国文研本との校異を右傍（ ）内に示した。但、詞書にある詠作年次・場所等についての記事に関しては、内容に違いがある場合のみ（ ）内に注記した。
- 一、翻字は原則として原本通りとする。但、以下の項目については改めたところがある。
- 一、旧字体・異体字・合字は原則として通行の字体に改めた。
- 一、適宜、句読点・並列点を施し清濁を分かった。
- 一、割書部分は《 》で括り示した。
- 一、見せ消ちは網掛けで示した。
- 一、その他、私の注記事項は（ ）で示した。

〔翻刻〕

秋

早秋 寛文六年六月家月次会に

377^通 野べはけさわきて涼しき秋風をまねき得たりとみゆる小薄

延宝三年七月家月次会に

378 音かへてうらがなくも秋の色の今朝はみち来る奥津しほ風

相州藤沢遊行上人何阿よりまねかれて、彼てらにまかりける時、二首歌⁽²⁾の中、おなじ心を379 池の面⁽¹⁾の今朝散そむる一葉にも秋の哀や先うかぶらん

每家立秋 《承応三年六月廿九日／中山備州会せられるに》

380 玉のうてなむぐらの宿も来る秋の淋しき色はなべてみゆらん

〔国文研本380〕「初秋月 弘 哀おもしろく候また秋きて千々の物おもひこの夕月やしらせそむらん」が入る

初秋風

381 弘 吹そむる秋風見えて打なびく野辺の尾花の袖のすゞしき（き）

初秋露

382 露も今朝結びそへけり百草の花のひもとく秋来りとして

新秋雨

383 立そめしあき風待てすゞしき（き）もきはふ端山の村雨のそら

浦初秋

384 資 うら風も音吹かへて芦のやのなだの塩やも秋や立らん

385 木間なき波路にも今朝立そめて心づくしの浦の秋かせ

386 うら風もけさ音かへて哀また秋になるとの奥津しほかせ
〔国文研本初句「うら風も」（き）〕

初秋扇

387 資 秋風の吹そむるよりねやのうちになれし扇ぞうとく成行

388 弘 音にたてゝ吹よりうとく成行や馴し扇のなかの秋かせ

残暑

389 通 一葉散柳の木かげ秋来てもなを立さらですゞむ暮かな

390 夏の日をまねきかへすとみゆる哉秋来ても猶ならず扇は

武蔵の、ほとりに住ける比おなじ心を

391 秋風の立にし後も果しなきあつさぞこもるむさしの、原

七夕霧

392 弘 ひこ星の逢せもしるくつまごめに八重垣つくる天の川霧

七夕露 堀田一輝会

393 こよひ置草木の露は七夕のむすぶ契りの絶ぬ数かも

野外七夕

394 咲匂ふ野辺の七種たてながら今宵や空の星に向けん^手

七夕衣

395 立ぬはぬ衣をきながら織女の手^てに任せてや今宵手向む

(国文研本は歌題「七夕衣」の下に「讃州高松少将の家に成田高玄と云者／読せける歌」とあり、395番歌は397番歌の後に配置される)。

七夕糸

396 彦星のくへきよしるく引はへてなれも手向るさ、がにの糸

七夕琴 讃州高松少将の家に成田高玄と云者読せける歌(国文研本には「讃州高松」以下の記事なし)

397 七夕のむつごともまだつきなくに涙かきなす別もぞうき

398 たなばたのあふからごとくに物やおもふ引わかれゆく暁のそら

七夕船

- 399 天の河しのお中かは暮ずともはや漕いだせつまむかへぶね
星夕瀑書
- 400 七夕の枕のちりもかゝるやとしみさす文をはらひてぞかす
- 401 手向なす空にやうけんをのづから今宵ふみ見る鵲のはし（国文研本初句「手向なす」^{ばイ}
- 乞巧典（巻）
- 402 うけひかば空にしかよへ七夕に今宵手向るかごとばかりも
- 403 七夕にかす玉琴にむつごとをつくしもはてず引やわかれん
- 七夕後朝
- 404 消かへり鵲の羽にことづて、けさをくるらん露の玉づさ
- 405 玉手箱明行けさはあまの川うら嶋が子のおもひもぞそふ
- 野分
- 406 おれかへり露もたまらずはしたなく野分にたへぬ本あらの萩（国文研本第二句「露も」^{露イ}
- 秋山
- 407 夕日（此歌詠而書也可除）かけうつる尾上に虹見えてむらさめ晴る秋の山もと
- 閑居秋風
- 408 露払ふ人こそみえね秋きては風のみわくる蓬生の宿
- 露 寛文二年八月廿五日家月次会（へに）
- 409 あれわたる庭もまがきもさもあらばあれ我袖残せ秋のしら露

野径露

410 玉だれのこすの大的、花の露袂にかけて分ぬ日ぞなき

原露

411 置露をみち来る人や分つらんみだれて見ゆる武蔵の、原

露脆

412 置あへぬ草葉のみかは秋来ても袖にももろき露の夕風

閉庭露

413 露けさも分ずはしらし大方におもふ心やあさぢふのやど

秋夕 寛文七年七月家月次会に

414 物毎に哀をそへぬ色もなしいかなるゆへぞあきの夕ぐれ (国文研本第二句「哀をそへぬ」)

延宝八年十二月家月次会に

415 ひたすらに思ひすて、もかなしきや心のほかの秋の夕暮

416 淋しさもうさも限りと思ひこしね覚に増るあきの夕ぐれ

田家秋夕

417 打はへておしねかりほす小山田のもず鳴秋のくれぞ淋しき

海辺秋夕

418 もしほやく煙の色も秋といへば哀立そふ浦の夕なき

秋花

419 いひしらぬ色香ぞこもるませの内に秋の千種の花をつくして

草花露

420 通 虫の音を添ても見ばや百草の花野をうつす庭の夕露

421 雅 花薄置露深し秋の、のさ、分し朝の袖とみるまで

草花告秋 堀田一輝会

422 吹かはる風も尾花がもとよりや秋の思ひをしらせそむらん

423 萩薄立もおくれず花にさきほに顕れて秋を見すらん

雨後草花

424 晴て又日かけぞそむる百草の錦織出すあめのいとすじ

萩 寛文十一年七月家月次会に

425 おしなべて小萩咲野に紫の一もとをだに哀とはみじ

延宝八年十月家月次会に

426 誰うへて野路の玉川秋はぎの花の所と名に流らそむ（国文研本結句「名に流けむ」）

庭萩 小関信政が会せしに

427 秋霧のまがきの小はぎ露をおもみ梯に立宮城の、原

庭萩露

428 月にみば猶いかならん秋萩の露の玉しく庭のゆふべを

萩露 寛文十三年七月家月次会に

429 置よろしく候。そふもはらはぬ風は心あれや露にいろます本あらの萩（国文研本第四句「露のにいろます」）

430 まはぎ原露おもくとも紫の心をくだく風やまつべき

431 白露の古枝の萩はいにしへを忍ぶ涙や置あまるらん

432 露ぞ猶限りしられず乱れぬる忍ぶにまじる萩が花摺

月前萩

433 咲つゞく野辺やいかにとみる月にみがく籬の露の玉萩

434 秋風にかたよる露の月影もむらごにみゆる萩が花ずり

萩映水

435 朝日かけさすや野沢の霧晴てうつる真萩の色も多ならぬ

萩花蔵水

436 行水のしづえひたせる秋萩の散ぬもつかぶ野路の玉河

萩如錦

437 朝日影待とる露の小萩原ぬれし錦をほすかと思ふ

折萩

438 さすが又折もつくさぬ萩がえに人の心の花ぞのこれる

萩風（萩） 寛文六年七月廿五日家月次会に

439 露はらふおぎの上かぜ音ふけぬ結びもとめぬゆめの枕に

相馬霜台御家三而、彼御領知中村天神奉納の中

440 くる秋をひとり待とる音立て我はがほなる萩（萩）の上かぜ

山居萩（萩）

441 淋しさはさすが馴ても柴の戸に萩（萩）ふく風の音ぞ堪うき

萩（萩）催涙

442 袖（弘）にしも波か、れとや秋に吹入江さびしき萩の上かぜ

や月前萩 《寛永十四年出雲国大社へ打宅公軋す、めて、八雲の／神詠を首に置、三十一首歌人に読せける内》

（国文研本詞書冒頭「寛文（永）十四年」）

443 やどからぞ秋の哀も増りける軒（月）もる風（月）に萩の上かぜ

おなじ心を

444 吹（弘）ま、に月かけながら露ちりて風こそやどれ庭の萩原

萩近枕

445 吹はらふ露もさながら敷妙のまくらにをつる萩の上かぜ

女郎花

446 置露にむすほ、れたる女郎花誰秋風に身をしほらん

447 露になびき風にみだれて一かたに契り定めぬ女郎花哉

延宝八年十月家月次に

448 うき名もやかひなくた、ん女郎花手枕の、の露の契に

中山隠州会せられけるに

449 秋のの、霧間になびく女郎花ほのみし色ぞ面かけに立

閑庭薄

450 しづけしなはらふ跡なき夕露にやどる月まつ庭のをすゝき

451 花薄誰まねく覧引植てうき世の外とおもふすみかに

るもじを置て

452 るり色にさける月草花薄露置^(置てる)みてる庭のしづけさ

行路薄

453 小萩原まじる尾花は朝立てたび行人の袖かとぞみる

454 等閑に誰かは過ん花薄まねかずとても野べのけしきを

岡薄

455 なびく也岡部のわさ田かる跡にほなみのこれるくろの小薄

朝顔

456 あけば又まほにむかはん夕露にひもときかけし朝がほの花

457 つれなくも残るをならへ有明の月よりさける槿のはな

籬槿

永井正次会に

458 さすが又折へてもあらずなよ竹のまがきにかゝる露の朝がほ

稲妻

459 村雨の名残の露も岡べなるわさ田ほのめくいなづまのかげ

初雁 延宝二年八月家月次会に

460 またれつるいなばの風に聞ゆ也ちぎりわすれぬ初雁のこゑ
 461 渡りそむる雁金なれや大空に一筋ほそき雲のかけはし

朝雁

462 朝日かけほのかにみえて秋霧のはる、田面にをつる雁がね

暮天雁

463 一筋の雲かとみれば山のはの入日にをつる初雁のこゑ

月前雁

464 雁がねも今宵ぞわたる澄月のかつらや花に千重まさるらん

465 かけてくるつばさの露の玉づさも読とく計すめる月哉

466 村雲は跡なくすめる月かげに又ひとくもりわたるかりがね

467 通 さしのぼる月かげきよき麓田のほなみにわたる雁の友船

暁初雁 寛文四年八月家月次会に

468 くまもなき空に一筋有明の月にはへなす天つかりがね

霧中雁

469 明石がた雁ぞとわたる朝霧に鳴がくれ行舟とみるまで

470 霧のうみからる数そふ声計聞えて過るかりの友舟

初雁連雲

471 空弘の海に雲のかけはしかけそへてひと筋わたる天つかり金

雲端雁

472 夕日影たえどみえて小山田のおしね雁がね雲に鳴なり

(国文研本では「雲端雁」472番歌は「風前雁」473、475番歌の後に配置される)

風前雁

473 是や其忍ぶ文字ずり秋風にみだれてみゆる衣かりがね

474 秋風雅にしらべあはするこゑたて、ことちに似たる天つかりがね

475 ふき送る雲のうはがきうすくこく風にみだる、雁の玉づさ

嶺初雁

476 数見弘えて夕日よろしく候さやかにつくばねのみねより落る雁の一つら

田上雁

477 小山田弘のいなば吹しく秋風に落くる雁のつらもみだれて

鶉

478 なれも又秋のおもひを音にたて、尾花が本に鶉なくらん

479 床の上に身はならはしの秋風も夕はさぞなうづら啼らん

夕鶉

480 誰きけと浅茅が末に床しめて夕日がくれに鶉なくらん

481 秋の哀堪かねつ、やをのが名のうづら鳴也のべの夕ぐれ

- 482 曉鳴 延宝七年八月家月次会に
ねざめうき秋の思ひのかずくりに又かきそふる鳴のはねがき
鹿声幽
- 483 たぐへ来る嵐やよはる小山田のほのかになりぬさをしかのこゑ
田鹿 つもじを置いて、堀田一輝会に
- 484 露ふかき秋の山田のいな庭しくものなしと鹿や馴ぬる
田家鹿
- 485 通 音にたて、哀な告そしかりとてそむかれなくに山田守身を
寛文四年八月星野田寿がもとにて
- 486 色になる門田のほなみよるくのね覚になる、棹鹿のこゑ
海辺鹿 旦那院僧正胤海御坊三而
- 487 清見がたよひくごとに鳴鹿のつまやへだつる波の関もり
寛文七年九月家月次会に
- 488 つれもなきつまどふ鹿の我からと鳴やもにすむ虫あけのせと
延宝九年九月廿五日家月次会に
- 489 みなと田のいな葉のほなみよるくは浦風寒み小鹿なく也
山鹿
- 490 白雲の八重たつ山に鳴鹿は隔つる中をつまや恋覧

暮山花^鹿

491 淋^弘しさは山田のおしね色付て残る夕日にを鹿なくこゑ

夕鹿

492 岡のべのわさ田打なびく夕風に鹿もほに出て妻や恋らん

夜鹿 寛文六年八月家月次会に

493 小鹿たつ山田のほなみ秋風によるこそまされつま恋のこゑ

494 鳴鹿の思ひやさぞなから衣夜を重ねても妻しあはずは

495 夜をへてもあはずは何を玉の緒にかけて小鹿の妻を恋らん

月前鹿

496 このまよりもり来る月に鳴鹿は心づくしのつまや恋らん

497 哀その有明のかけに鳴鹿はつまやつれなき月や恋しき

暁鹿

498 ふかき夜の涙もよほす鹿の音や隈なき月のくまと成らん

鹿声何方

499 山彦に聞もわかれずかた糸のこなたかなたの棹鹿のこゑ

籬虫

500 千代かけてあかぬ心に契らなん宿のまがきの松虫のこゑ

野虫 松平相模守殿御会に

- 501 打まれて子日せしのに秋も猶心ひかる、松むしのことゑ
- 502 秋の、の千種の花のさまぐに鳴も色有むしのことゑ哉公
- 503 虫の名のまつとし聞ば露分て明日もやのべに立かへりこん
- 504 雨後虫（国文研本「雨後虫」後イ）
 降雨に契有とも蓬生やよふけて誰を松むしのことゑ
- 505 古壁蝓
 夕虫 寛文八年七月家月次に
 見も聞もあかぬことなし秋野、に虫の音そふる花の夕ばへ
 夜虫 延宝三年九月家月次に
 灯をそむけしかべの蝨鳴も夜寒のかすかなることゑ
 深夜聞虫
 みせばやと誰を松虫音にたて、獨更行あたら夜の月
 寢覚虫
 秋ふかきね覚の床のきりぐす我身の老にたぐへてぞ聞
 ある所に籠の内に鈴虫入たる声を聞て
 霜をよけ露をそ、げば鈴虫の籠のうちながらふりぬ声哉
 駒迎
- 506 見も聞もあかぬことなし秋野、に虫の音そふる花の夕ばへ
- 507 灯をそむけしかべの蝨鳴も夜寒のかすかなることゑ
- 508 みせばやと誰を松虫音にたて、獨更行あたら夜の月
- 509 秋ふかきね覚の床のきりぐす我身の老にたぐへてぞ聞
- 510 霜をよけ露をそ、げば鈴虫の籠のうちながらふりぬ声哉

511 相坂の関路さやけき月影にひかれてやこしかひの黒こま

月

512 わきて又かつらの色もこがるゝは今宵や月の時雨なるらん (国文研本第二句「色も」)

八月十五夜

513 人心今宵は月に成はてつたゞ大空にすめるのみかは

514 くらべては花の千枝も色ぞなき名高き月の桂一本に

515 世に高き名にこそたてれ今宵月としに稀なる影を待えて

516 猶あかぬ心をたねと詠めても今宵の月にことの葉ぞなき

昔松永貞徳にいぎなはれて湖辺ニ而同夜月をみて

517 下ぐもるかげさへ見えて鳩の海や底のも中の秋のよの月 (国文研本初句「ぐもる」)

同じ夜の蝕なりける時よめる

518 今宵など久米路の橋に通ふらん埋木ならぬ月のかつらの

同夜くもりけるに

519 誰しかも今宵の月に門さゝん天の戸ぼそは雲にとづとも

520 高き名はさらでもしるしよしや月隈なきをのみしたふべきかは

あめふりければ

521 しっかりとて降けたぬ名を雨雲に先歎かれぬあたらの月

同夜の月明らかなるに虫を聞て

- 522 鳴つくせ千種にすだく虫もさぞ今宵の月に声は惜まじ
不知夜月
- 523 咲みてる月の桂の花盛散そむるかげやいざよひの月
居待月
- 524 吹はらへ月待かねてゐるちりの白雲か、り山るのあきかを
臥待月
- 525 公老が身はをのづからなる夕まどひ待としもなくむかふ月哉
廿日月 寛文八年家月次会に
- 526 呉竹の臥まち過て長きよや山のはつかにむかふ月影
逢友見月
- 527 見し昔しらぬ行ゑも思ふどちかたらふ月にあかずふけ行
終夜見月
- 528 出るより隈なき月の明がたは雲にあへるもいとゞえならぬ
嶺月
- 529 弘白雲はよそに成行秋風にすむや高まの嶺の月かけ
山月 延宝八年八月家月次会に
- 530 月清み立ちぬる雲の塵をだにすへじと払ふ床の山かせ
くもりなく遠山鳥の尾上より月も鏡をかけて出ぬる

山月聞鐘

532 鐘の音も明がた近しかづらきやとよらの寺の西になる月

山家月

533 よせかへる波の哀も立そひぬ海遠からぬ柴の戸の月

山家翫月

534 とひみずはいかでしらまし山里に残る隈なき月の哀も

野月 寛文十二年九月家月次会に

535 置みてる露の光はいかにともえやはいはれの野べの月影

536 通 武蔵のは海より月のいづるかと見えて尾花の波や越らん

537 ふみ見ても跡なき雪や大江山いくの、末にすめる月影

野外月

538 かげやどす露の真砂のすり衣分入のべに月ぞみだる、(国文研本第二句「露の真砂サの」)

関月

539 弘 あふ坂おもしろく候。の関のわらやのふる事も知らん世、の秋の月かけ

橋月

540 乗駒のあ音もたかく澄月に誰うちわたすせたの長はし

池上月

541 弘 ねぬなはのねぬ名やた、ん夜をかさねますだの池の月の光りに

- 542通 さやけさは秋の最中に見しよりも今宵益田の池の月影
- 543弘 蓮葉の濁にしまぬ池水に宿りて清き秋のよの月
- 544資弘 江月
ふりにける堀江の波に影とめていまも玉しく秋のよの月
江上月 山本春正武州の旅宿にて会せしに
- 545 ふかくしも思ひ入江のあきの月ふくるもしらず舟をうかべて
月照水 寛文七年八月家月次に
- 546 すみわたる月影清し川の瀬になびく玉もの底みゆる迄
河月
- 547 とめ行ばながれも遠く澄月の一筋しろきあきの河水
湖月
- 548雅 すはの海や月かげさえてよるくは冬をもまたずしく氷哉
- 549弘 風たえて月に音なきさゝ波や塩ならぬ海の影ぞみちくる
浦月
- 550 波の上にみし友船は跡たえて残るかたみの浦の月かけ
海辺月
- 551 さやかなる月もよをへてみいやましに芦べの塩のみてる影哉
- 552 波間より出る光りもみつ塩の入海遠くすめる月かな

553 〔弘〕ひたすらに世を海辺ともおもほえずみるめさやけき月のよ頃は

554 〔弘〕山里物がたりの取なし面白候にみしかげよりも海づらによはなれてすむ月の哀さ

崎月

555 とまるべき宿はありとも三輪がさきあこがれ行ん月のよ頃は

塩屋月

556 〔通〕くまなさも中くみえて須磨の蟹の塩焼煙月にたな引こころなきしわざもイ〔国文研本初句〕くまなさも中くみえて

渡月

557 わたし守もくれてはみえず月ひとりすみだ河原の夜の淋しさ

浪月

558 音さえてあらいそ高くよる波にくだくる月の影もすさまじ

里月

559 秋（ま）よたゞ里をばかれずとふ月もくるしき物とながめなれぬる

岡月

560 〔弘〕すむ月に誰しらぶらん玉琴の岡べのあきの夜半の松風〔国文研本には合点なし〕

田家月 戸川土州御家の御会に

561 ひたはへてもる音絶ぬ小山田のしづもこゝろや月にひくらん

閑中月 村田忠庵がもと三冊

562 風たゆる庭のさゝがきそよ更に音せぬ月ぞ独ふけ行

閑居月 相州玉繩円光寺^二に

563 露払ふ風さへ絶てふくるよの蓬が庭の月ぞしづけき

庭月 寛文六年七月家月次に

564 所せき宿のまがきや住侘ん心をすます月しとはずは

船中月 〈浅見栄可旅宿にて会せしに〉

565 秋のよのふくるもしらず静なる入江の月に舟をうかべて

竹間月

566 月はなを夏冬よりも秋こそと千尋有かげにすみまさるらん

竹の葉に待とる風の村時雨もるかと思れば月ぞさやけき

社頭月

568 月ぞ猶外にもこえて住吉や松の落葉もかぞふ計に（国文研本結句「かよふ計に」^ぞ）

翫月

569 公 よしや月老となるまで詠来ぬいむとも今は幾程のよぞ

月不扱所

570 資 弘 澄月のかげぞへだてぬ芦すだれかゝるすまひも玉のうてなも

名所月

571 すみだ川ことゝはん月の都鳥秋のおもひは有やなしやと

月契多秋 戸川土州御会に

572 さゞれ石の数もあらはにすむ月のいはほとならん秋もみてましへみてまし

573 世々の秋ちぎるもあかず友垣のへだてぬ中の月のまどひはへのまどひは

九月十三夜

574 名に高き後の今宵とすむ月や神代をうつす鏡なるらん

575 玉くしげ秋の二夜の余波とて月のかゞみもさぞみがくらん

永井正次会せられしに

576 今宵こそ秋つ嶋根の月ならめ同じ名高き影はあれども

小関信政よませしに

577 めでよ猶今宵も高き長月や最中の秋に増る光りを

578 すむ月の秋の最中に逢みての後の今宵や光そふらん

579 弘てりまさる今宵にみればみし秋の月の桂も半そめけむよしのく候。

九月十三日家にて源氏物語の夕夕タギリ巻ぎりの巻講じ侍つゐるに、人々歌よみ侍けるととき、折しも月明らかなりけれ

ば、かの巻に、十三夜の月はなやかにさし出たり。小倉の山もたどるまじうと有を思出て

580 待出る小倉の山もたどらじといひし斗ぞ月の今宵は

八月箇のに閏有ける年、九月十三夜の月を詠て

581 名に高きは月長月逢みての後の今宵ぞ分て隈なき

582 三夜までもみるはめづらし名に高き八月かさねて長月のかげ

八月十五夜くもりたりけるに、又九月十三夜雨の降ければ

583 名に高き月のかゞみの玉匣二よながらに何曇るらん

月前松風

584 木間もる影だに有を澄月に心づくしの軒のまつかぜ

月前木

585 ふみわくる人は音せで桐の葉の落る木の間に月ぞもりくる

月前鐘

586 明るまでみるにもあかず澄月をいかにねよとの鐘は告らん

釣夫棹月 横山知清会せられしに

587 浦人や小ぶねさしはへ釣の糸のくるゝを待て月に出らん

深夜月

588 霜通ならで置露白く影みちてよや更ぬらん浅茅生の月

暁惜月 玉繩円光寺三而

589 あかず思ふ月の名残七の数そひて暁いそぐ鐘のこゑかな

山霧

590 色そはん木々の梢も奥ふかく霧に籠れるあきの山里

山家霧

591 秋の色弘に夕日ほのめく峯の庵霧の絶間に見えて淋しき

河霧 延宝八年閏八月家月次会に

592 吹払ふかたへはれ行うき霧に風の跡みるあきの川なみ

593 〱 さしのぼる山の朝日はさだかにて麓に残る宇治の河霧

594 〱 吹のぼる谷風絶て初瀬川そこともみえずふかき朝ぎり

海辺霧

595 〱 暮そむる遠の波間にほのみえて霧にいざよふ蟹のつり船

堤上霧 延宝九年九月廿五日月次会に

596 早瀬川一筋晴て所〱堤づたひにのこるあきぎり

霧底筏

597 しまま川朝ぎりふかし筏士の海に出るもいざしらぬまで

秋雨

598 うき秋の物おもふ袖のたぐひとや尾花しほる、夕暮の雨

秋山

599 〱 深よろしく候からぬ外山さびしくもず鳴てはしの立枝に残る日のかげ

寛文四年七月家月次会に

600 《此歌重出〱可除之》夕日かげうつる尾上に虹みえて村雨はる、秋の山本

秋水

601 秋の色をうつす夕日も影さびし水草清く澄る沢べに

秋田 金森範圍会せられしに

602 夕日さす山田のほなみ打なびき風の姿も見えて淋しき

海辺秋望

603 秋の色に夕日うつろふ奥津すの塩干のかたに落る雁がね

田家秋興

604 鳴のたつかどたの面の夕霧に晴て淋しき秋の日のいろ

擣衣

605 なたまで枕にひゞく小夜衣うつも小家の近きとなりは

延宝五年八月家月次に

606 小夜ふかくきけばなみだもよほして砧の音ぞ袖にこぼるゝ

607 たゆむかと聞ばしきりてふきをくる風の心にうつ衣かな

聞擣衣 寛文六年九月家月次会に

608 槌の音も風にみだれて片糸のこなたかなたに打衣かな

月前擣衣 岡田利永家二冊

609 すむ月に心くだけと紫のねずりの衣誰かうつらむ

610 いとゞしく月に哀を打そへてきぬたの音や空にすむらん

海辺擣衣

611 妹が鳴かたみにひゞく槌の音や波かけ衣打かはすらん

や名所擣衣

612 やゝさむくなるみの浦の蟹人も波かけ衣今やうつらん

里擣衣 亀井与州御会に

613 よをさむみ名のみしのぶの里人も音にたてゝや衣うつらむ

菊

614 咲きくの花にせかれてむすぶての雫もかほる山河のみづ

山路菊

615 をのづから千年の坂も越ぬべし山路の菊にうき世忘て

谷菊

616 とめくればよくいひおほせられ候。匂ひのふちを谷風にうちいづる波とみゆる白ぎく

水辺菊 永井正次会せられしに

617 匂ひこそ測はなしけれ山川のあだ波とみる白ぎくの花

618 山川のきくの下水汲てこそ千年のあきも手にまかせつれ

月照菊

619 千世かけて月をそめてん是ぞ此老を隔つる菊の籬に

籬菊

620 山ぶきの同じまがきにそめ出て色も隔ぬそがぎくの花

621 あさがほのあだにしほれしまがきより咲て霜ふる白ぎくの花

延宝八年閏八月家月次会に

622 色も香もあせめやふかきませの内に菊のきせわた雪のつむ迄

菊花盛久

623 霜を経て猶照まさる白菊の花こそ星の林なりけれ

黄葉

624 山姫のあきの錦のひとしほに千入そむるや心なるらん

625 昨日かもなくねしぐれし空蟬のは山の木末はや染てけり

初紅葉

626 時雨をもまたで紅葉の先一木心とそむる色をみすらん

雨後紅葉

627 村時雨晴て色こそ夕露に日かげ待とる庭の紅葉々

山紅葉 松平相模守殿御家にて

628 吹払ふ霧よりおくも顕れて風色こき嶺のもみぢば

629 雅 ぶり出しあめや紅山姫のぬる、袂の色ぞこがる、

630 一通り晴る跡よりそめまして時雨色こき峯の紅葉々

631 山ふかく花にうかれし人心又そめかへすあきのもみぢ葉

峯紅葉

632 しゐてまづそむる心の色ぞこきまだ初入のみねのもみぢば

岡紅葉

633 時雨行岡のやかた（百首に有、可除也）のうす紅葉ねての朝けの色ぞまたる、

滝紅葉

634 山姫の袖の錦を染分て残すやたきの瀬々の白糸

河辺紅葉

635 谷川の涿のみどりも紅にそめて下てるきしの紅葉々

江紅葉 延宝四年九月家月次会に（四）

636 もしほやく湊入江も紅に染る紅葉の色ぞこがる、

紅葉写水 鍋嶋泉州御会に

637 影ひたす紅葉の色は唐錦あらふ入江やこ、にかよへる

夕紅葉

638 鴟なきて夕日さびしき山里のぬるでもはしもみぢする比

庭紅葉

639 あかず猶そむるにつけて染まさる心も手入庭のもみぢ葉

蔦紅葉

640 そめ残すみ山隠の木、もなし朽木もかゝる蔦の紅葉ば

紅葉透霧 堀田一輝御家にて

641 染てけりかさぬる峯のうすものにすきて色こき山姫の袖

松間紅葉

642 立ならぶ緑を分て染つくす紅葉の千入松もひとしほ

松下紅葉

643 松かげに春みしつゝ、じ染かへて猶色ふかき下もみぢかな

紅葉交松 田村右京兆御家の御屏風に

644 夕時雨くもる松原も照そふや染るもみぢの色のちしほに

暮秋紅葉

645 霜ならで秋のかたみに置物や黒髪山の木ゞのもみぢば

暮秋月

646 秋も今末の、浅茅霜がれてみるかげほそく月ぞ残れる

暮秋露（国文研本は、647番歌「暮秋露」と648番歌「暮秋霜」の排列が逆）

647 うしやけふ暮行秋のかたみとて置もあだなる袖の白つゆ

暮秋霜

648 かり残す色も淋しく秋ふけていとゞあれ行霜のをくて田

暮秋雨

649 袖にうき露も時雨もほし侘て身さへふり行秋のくれ哉

暮秋菊

650 ながれ行秋の日数も山河によどむ瀬有と匂ふ白ぎく

暮秋鹿

651 あきふけて紅葉散しく山風に涙なそめそ棹鹿のこゑ

九月尽

652 月の秋又めぐり逢程遠しけふくれて行余波のみかは

653 つるに其有明の月のつれなさも残らぬ空に秋ぞ暮行

654 夕日かげほのかに見えて花薄まねきもとめず秋ぞ暮ぬる

九月尽暁

655 心詞珠重に候。せよかけのたれ尾の長月も今宵斗のあかつきの空